

# 悠久の時間

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

いとう たけし  
伊藤 毅

## 神話の島

「私の名前は加納クレタ、姉の加納マルタの仕事を手伝っている。(中略)私はまだクレタ島には行ったことはない。ときどき地図で眺めてみる。クレタはアフリカに近いギリシャの島だ。犬のくわえた骨つき肉のようなごわごわと細長い形をしていて、有名な遺跡がある。クノッソス宮殿だ。若い英雄が迷路をつたって女王を助ける話。もしクレタ島に行く機会があったら是非そこに行ってみようと思う。(村上春樹「加納クレタ」『TVピープル』文藝春秋)。ちなみに、水脈を読む謎の姉妹、加納マルタ、クレタは、村上春樹のベストセラー長編『ねじまき鳥クロニクル』にも再登場する。

クレタ島はどこかしら謎めいている。それは村上也触れているように、ギリシア神話に出てくる迷宮(ラビュリントス)のモデルがクレタ島のクノッソス宮殿であり、ヨーロッパ最古のミノア文明がここを舞台に華開いたと考えられているが、その実態は依然、謎に包まれているからだ(図-1)。

ギリシア神話に登場する迷宮の話は次のようである。

アステリオスはクレタの王であったが、跡継ぎを残さず死んだので、弟のミノスが王位を継承しようとする。しかし民衆の強硬な反対に遭い、ミノスは民衆を説得するために、自分こそが神々から王国を授かるべき人物であり、その証拠に自らの望みはすべて神々

図-1 クレタ島地図



が叶えてくれると宣言する。ミノスは海神ポセイドンに頼み、牡牛を生け贄として捧げることを条件に海底から予言通りの見事な牡牛を手にし、王位継承に成功する。

しかしその牡牛があまりにも美しかったので、ミノスはこれを手放すことが惜しくなり、別の牡牛をポセイドンに生け贄として遣わせたところ、ポセイドンの逆鱗に触れる。ポセイドンはその牡牛を凶暴にさせ、ミノスの王妃パーシパエーがこの牛に恋情を抱くようにする。かくして牡牛とパーシパエーは交わり、半獣半人の怪物ミノタウロスを生む。

ミノス王は建築家ダイダロスに命じて巨大な迷宮をつくり、そのなかにミノタウロスを封じ込め、毎年アテネから少年少女各7人を人身御供として迷宮に送り込む。ある時アテネの王子テーセウスが生け贄の一行に密かに加わり、迷宮のなかにいるミノタウロスを退治し、ミノスの娘アリアドネがテーセウスの体につけてくれた糸(アリアドネの糸)を頼りに迷宮を抜け出し英雄となる。(アポドーロス『ギリシア神話』)。

## 最古の西洋文明 - ミノア

ギリシア神話に登場する迷宮は長い間、あくまで架空のものと考えられてきた。しかし1878年クレタ商人であり、古物収集家でもあったミノス・カロケリノスがクノッソスにおいてこの遺跡を最初に発見する。その後

ミノスを含めて数人が小規模な発掘を試みていたが、本格的な発掘は1900年アーサー・エヴァンス(Arthur Evans)の登場をまたねばならない。

エヴァンスは先史学者ジョン・エヴァンスの子として生まれ、名門ハロー校卒業後オックスフォードに学んだエ



写真-1 エヴァンスによる発掘現場  
(中央の白いスーツの人物がエヴァンス)

リートである。貧しい家に生まれ独学でトロイの発掘に挑んだシュリーマンとはあらゆる点で対照的な人物である。エヴァンスはトロイ出土遺物の展覧会を契機にギリシア考古学にのめり込むようになり、クレタ島の中心都市イラクリオンの南数キロに位置するケファラの丘の土地を買収し、1900年3月クノッソス宮殿の本格的発掘がスタートする(写真-1)。

エヴァンスによる発掘は1900年から1905年にかけて行われ、毎年100～200人の人夫が動員された。とくに最初の2年間にほとんどの部分が発掘され、1901年にはすでに宮殿の基本平面が復元されている。そして驚愕すべき歴史的事実が次々と明るみに出されることになる。

クノッソス宮殿は前2000年紀の初期青銅器時代に属するもので、出土遺物などからミケーネ文明、ギリシア文明に先行するヨーロッパ最古の文明がこの宮殿を中心に栄えていたことが明らかになった(写真-2)。エヴァンスはこれをミノス王にちなんで「ミノア文明」と

写真-2 クノッソス出土の牛頭リュトンと双斧



名付け、伝説のラビュリントスこそクノッソス宮殿にほかならないと結論づけた。とりわけ重要な発見は粘土板に刻まれた「線文字B」と呼ばれる文字であり、ミノア文明が文字をもつ高度な水準のものであったという事実とともに、ミノア文明の編年の手がかりが得られたのである。

### 謎の宮殿クノッソス

クノッソス宮殿はイラクリオンから続くなだらかな丘陵地にあり、低いケファラの丘の東端に位置する(写真-3)。宮殿は50×25メートルの中央広場を取り囲むようにして、さまざまな用途の諸室が複雑に展開している(図-2)。宮殿は不思議なことに周囲を取り囲む一切の防御施設を欠いている。当時の王権は強大であり、エーゲ海のほぼ全域を支配下に収めていたから防御が必要なかったという説があるが、はたしてどうか?また考古学者勝又俊雄氏はこの遺跡を宮殿でなく、礼拝所複合体ではなかったかという大胆な仮説を提示している(『ギリシア都市の歩き方』角川書店)。しかしこの仮説はあまりにも飛躍が多く、大胆に過ぎるだろ



写真-3 クノッソス宮殿



写真4 中央広場(行列の先に王座の間がある)

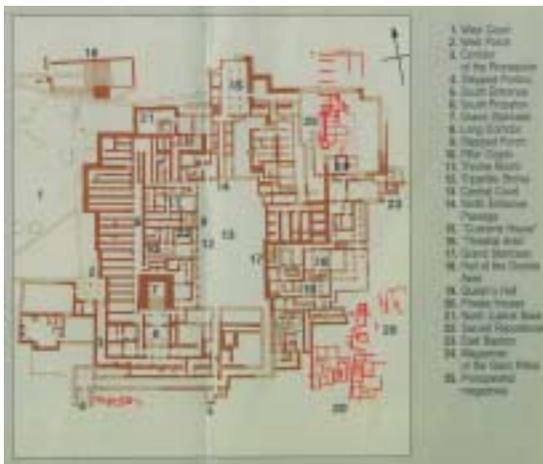


図2 クノッソス宮殿平面

う。囲郭をもたない宮殿のもつ意味は依然として謎に包まれているが、わが国の古代都城に城壁がなかったことに一脈通ずる魅力的なテーマがここには横たわっている。

というのは、この遺跡は王の居所であると同時に、祭祀施設、工房、倉庫、劇場など、さまざまな要素が複合したもので、見方によってはひとつの小「都市」と呼べるような存在であったからだ。図-2をみよう。中央広場(写真-4)の西の11が玉座の間(写真-5)、広場の向こう側の17が大階段(写真-6)、18が双斧の間、20が王妃のメガロンであり、これらは王家に関する諸室であった。一方西ブロックの西端には細長い小室

が連続するが(8の左側)、ここにはオリーブ油などの日常生活物資が大甕に貯蔵されていた。その他16が劇場地区であり、北門には税関があった(15)。税関の存在は流通の拠点、すなわち宮殿の都市的様相を示唆する。

すなわち、平面は複雑であるが、全体としては矩形の中央広場を核とした小都市のような明快な構成をもっているといえるだろう。エヴァンスはこれを迷宮に見立てたが、実際訪れるとそうした印象はない。むしろ矩形の広場という明確な中心の存在こそが卓越している。

古代ギリシア史の泰斗、高津春繁氏は戦後まもなく出版した『古典ギリシア』のなかで、ミノア文明を評して、「彼らの文化は古代の他の文化に比して、不思議なほど近代的である。(略)伝統の重荷はこの文化には認められぬ。感官によって知覚したものを頭脳の中で整理する力よりも、むしろそのままにうけ入れて、一度精神の濾過を経ているが、極端に視覚的で物の姿に捕らわれている彼らの頭脳はこれをギリシア人のように理想化することも、エジプト人のごとくに類型化することもせず、形の記憶を唯一のたよりとして、再現する」と述べる。これは壁画や工芸などの特徴について言及したものであるが、クノッソス宮殿の空間構成にもあてはまる卓見である。



写真-5 玉座の間

## エヴァンスの功罪

ところで画期的な考古学上の発見をなしたエヴァンスへの批判は根強い。その最大の批判はクノッソス宮殿の恣意的な復元に集中している。エヴァンスはきわめて短期間に大量の労働力を投入して発掘を進めたため、今日の考古学の水準からみると、編年その他の慎重な検討を要する学術的検討を経ないで結論づけた部分が少なくない。そして彼自身の想像力によって確かな証拠なしに復元が進められた。たとえば遺跡の最大の見せ場である玉座の間は、玉座こそオリジナルであるが、その他の壁画や天井のインテリア、室全体の構造などはすべてエヴァンスによる復元である。また大階段もオリジナルはほとんどなく、コンクリートと類似の石材によって復元されたものである。

現在の目からみれば行き過ぎといわざるをえないエヴァンスの復元に対して批判の目が向けられるのは当然で、クノッソス宮殿がユネスコ世界遺産に指定されないのもそうした理由によるという。この種の批判はよく理解できるものの、クノッソス宮殿のもつ圧倒的な存在感は、もはやエヴァンスという個人を離れて独自の世界をかたちづけていることは否定できない。彼が地中から掘り出した矩形の中央広場は紛れもな



写真-6 大階段

い発見であり、これはギリシアのアゴラやローマのフォーラムに先立つものだ。私自身はここにミノア文明の本質的な部分(高津氏のいう「近代性」)がシンボリックに表出されているように思うが、まだまだ多くの謎が残されている。

## イラクリオン

ギリシア神話のヘラクレスにちなむイラクリオン(Heraklion)は、クレタ島最大の都市であり、古代はクノッソスの外港として大いに繁栄したようだが考古学的な裏付けはまだ発見されていない。現在のイラクリオンの歴史で遡りうる確かな出発点は、824年アラブ人による侵入によってこの地に都市が築かれ、防御のために堀(アラブ語でハンダク)が巡らされた時で、イラクリオンの都市史はそれ以降のこととなる。当時は掘割をもつ都市という意味でハンダックスと呼ばれた。

つづく961年、のちにビザンティン帝国の皇帝になるニケフォロス・フォカスがハンダックスを攻略し陥落させる。ビザンティン時代に入っても首都として維持され、教会や修道院などが建設された。

1204年、十字軍がコンスタンティノポリスを陥落させた結果、クレタ島は領土分割でポニファース・ドゥ・モンフェラートの支配下におかれるが、ただちにヴェネツィ



写真-7/上 ヴェネツィア時代の要塞（兵器庫）

写真-8/下 モロシーニ噴水

アに売却される。ヴェネツィアはジェノヴァと熾烈な領有争いの結果、1212年に支配権を確立する。ここから400余年に及ぶ長いヴェネツィア時代の幕が開かれ、ハンダックスはイタリア語のカンディアに改められる。ヴェネツィア時代のイラクリオンは繁栄の極を迎え、豊かな都市文化が醸成された。

イラクリオンは第二次世界大戦でドイツ空軍による大

規模な爆撃を受けたために、多くの貴重な文化財を失った。それでもいくつかのヴェネツィア時代の遺構が残されている。とりわけ圧巻は港の防備のために築かれた堅固な要塞である(写真-7)。その堅固さは、のちオスマン・トルコが攻撃に手を焼き、ついに武力で征服できなかったという事実がよく証明している。

イラクリオンのちょうど中央付近に位置するモロシー



写真-9 ロッジア

1540年にスタートし、およそ30年が費やされた。

サンミケーリは、都市の防備施設だけでなく、町の主要施設も手がけている。写真-9はレティムノンのほぼ中央に位置するロッジアで16世紀に遡る名品である。ほぼ正

方形のプランをもち、正面と側面には3つのアーチ開口が連続する。ロッジアはかつて市政運営の会議所として使われていたが、現在は町のインフォメーション・センターとして再生されている。

方形のプランをもち、正面と側面には3つのアーチ開口が連続する。ロッジアはかつて市政運営の会議所として使われていたが、現在は町のインフォメーション・センターとして再生されている。

レティムノンの町にはこうしたモニュメント以外にも16～17世紀に遡る住宅が数多く残されていて、こうした伝統的都市住宅がさまざまに改造されながらも継承され、町の賑わいを生んでいる(写真-10)。

## レティムノ

クレタ島のなかで都市としてもっとも保存状態がいいのが、イラクリオンの西のハニア(Chania)との中継都市として栄えたレティムノ(Rethymnon)である。

レティムノにはビザンティン時代からヴェネツィア時代にかけての数多くの遺構が残されているが、建築史上重要な事件としてイタリア・ヴェローナの建築家ミケーレ・サンミケーリ(Michele Sanmicheli)のかかわりが挙げられる。サンミケーリは1526年教皇クレメンス7世に任命され、ヴェネツィア共和国の要塞視察を行いその強化に尽力した。当時ヴェネツィア領はコンスタンティノープルを陥落したオスマン・トルコの脅威にさらされており、防御を強化することが急務であった。レティムノの防御施設の設計はヴェネツィアの一連の国防政策の流れに位置するもので、都市を取り巻く城壁、城門、要害施設がサンミケーリの指導のもとに進められた。建設は

エーゲ海の南に浮かぶクレタ島には悠久の時間が流れている。最古のミノア文明、ビザンティン時代、ヴェネツィア時代、オスマン・トルコ時代、さまざまな時期の痕跡をみると、気の遠くなるような時間の長さのなかにあって、現在という時間はほんの一瞬に過ぎないことをつくづく思い知らされる。島という完結した世界はこうした時間の貯蔵庫として格好のトポグラフィなのかもしれない。

写真-10 レティムノンの町の賑わい

